

若竹千佐子「おらおらでひとりいぐも」の「老い」と「個」 —宮沢賢治「永訣の朝」「虔十公園林」の再創造の視点から—

大島 丈志

一、はじめに

文学において「老い」はしばしば青春の終わりや青春を再構成する時期として否定的なイメージで物語られてきた。

ただ、上記のような否定的な「老い」の造形は一つの型であり、多様な「老い」の様相も近代文学では物語られてきている。例えば「老い」をとらえたとされる深沢七郎「榎山節考」（『中央公論』一九五八年一月）において、おりんを代表として「老い」について生産から疎外された者を死すべき存在として描きながらも、執念深く生きようとする又やんや、村の習俗から離れ、老母のおりんを捨てようとはしない息子の辰平など、「老い」を排除する村の習慣にあらがう「個」も描いていた。文

学において「老い」とそれを体験する「個」と一口に言ってもその様相は多様である。

現代日本においては「超高齢社会」の中で「老い」が否定的でも世間からの引退でもなくなっている。

この時代状況の中で、現代の文学において「老い」がどのように語られているのか考察する必要がある。

宮沢賢治の詩「永訣の朝」の中の一節からタイトルが取られている若竹千佐子「おらおらでひとりいぐも」は初出『文藝』二〇一七年冬号（河出書房新社、第五六巻第四号、二〇一七年一〇月）、単行本は二〇一七年一月に刊行されており第一五八回芥川賞を受賞している。

この作品を通じて、一九八九年～二〇一九年、平成期における「老い」と「個」の描かれ方の一側面を考えたい。同時に本作のタイトルともなっている宮沢賢治の「永訣の朝」、また作中で引喩として使用されている「虔十

公園林」といった宮沢賢治作品の現代文学における再創造について考察していきたい。

なおテキストの引用は『おらおらでひとりいぐも』

(河出書房新社、二〇二七年一月) から行い、以降は頁数のみを記載する。

二、「超高齢社会」

日本は二〇〇七年以降、六五歳以上の高齢者が総人口の二二％を超える「超高齢社会」である。人口に占める六五歳以上の比率(高齢化率)が七％以上で「高齢化社会」、一四％以上で「高齢社会」、二一％を超えると「超高齢社会」と呼ばれる。日本では一九七〇年に、七％を超え「高齢化社会」に入っている。一九九四年には、一四％を超え「高齢社会」になる。そして二〇〇七年、二一％を超え「超高齢社会」となっている。二〇一八年一〇月時点の人口推計では高齢化率は二八・一％である。二〇五〇年には高齢化率が三七・七％と予測されている(一)。

次に、高齢化と同時に少子化についても見ていこう。

日本の少子化の一つの指標として、合計特殊出生率(ある期間において測定された女性の年齢別出生率を再

生産年齢(通常一五～四九歳)にわたって合計したもの)が挙げられる。この数値は一九七〇年に二・一三、二〇〇五年に一・二六にまで減少している。二〇一六年以降微増の時期もあるものの減少傾向が続いている。二〇一七年の合計特殊出生率は一・四三となった(二)。

「超高齢社会」「少子化」によって、高齢夫婦のみ、あるいは高齢単身世帯の増加も著しい。二〇一五年では、男性高齢者の一四・〇％、女性高齢者二一・八％が一人暮らしとなっている。二〇四〇年には、男性高齢者の二〇・八％、女性高齢者の二四・五％が一人暮らしになると推定されている(三)。

詳細は後に触れるが、若竹千佐子「おらおらでひとりいぐも」には、主人公の桃子さんが一人で食事をするシーンが数度描かれている。

「超高齢社会」と孤食はどのような関係にあるのだろうか。孤食に関しては次のように述べられている。

高齢者の場合においても、孤食環境はコミュニケーション不足とそれに伴う認知機能の低下や、食欲不振、栄養の偏りによって引き起こされる低栄養の問題とも関連し、介護予防の観点からも望ましくない

(四)

「おらおらでひとりいぐも」の桃子さんも孤食の場面が多い。これは同時代の「超高齢社会」における「孤食」の多い状況と重なるだろう。

だが、現代においては、家族の在り方そのものが多様化し、「孤食」をマイナスとしない、「個」を重視する動きがある。目黒依子は、家族に属するということが人生の必ずしも自明でも必然でもない社会が到来し、家族生活は人の一生の中であたり前の経験ではなくなり「ある時期に、ある特定の個人的つながりをもつ人々とてつくるものとしての性格を濃くしてきた」とし、「家族生活は個人にとって選択されるライフスタイルの一つ」となり、家族は個人の「支援要因」に変化し、そのような家族は「個人の一生の中で経験される時期や状況によって、その形が異なりうる」(五)と考察する。家族は人生のエピソードの一つとなっていく。そこには、本作品の桃子さんのように連れ合いに先立たれた一人暮らしの高齢者のライフスタイルも含まれる。

「超高齢社会」により孤食・個食はそのイメージを変えている。孤食・個食が容認される時代への移行である。一人で食事する「孤食」、同じ食卓でも別々のものを食べる「個食」の増加がデータでも裏付けられている。

二〇一六年、七〇代女性の二六・〇%、二〇代男性の二五・四%において家族と同居していてもほとんど毎日一人で食事を食べるという回答が出されている。また、「一人で食べることが都合がいいため、気にならない」「自分の時間を大切にしたいため、気にならない」「一緒に食べる習慣がないため、気にならない」「食事中に作業をするため、気にならない」の合計は、二〇一六年、四九・四%、二〇一七年、六〇・四%となっている(六)。

この傾向に関して早川和江は次のように述べている。

他との接点を持たず一人でいることの気楽さや、自由であることへの欲求の現れ、あるいは「ながら食べ」に対して恥の意識や無作法であるといったマイナスイメージを持たない人が増えている(七)

「孤食」の傾向の背後にあるのは繰り返し述べてきた家族の多様化、個人化である。

日本型近代家族は、第二次世界大戦後に成立した。廃止された家父長制のイエ制度の影響を残し、三代代以上が同居する直系家族形態は一九六〇年ごろまでは増加した。高度経済成長期に核家族が増加し、世帯構成員数の変化は著しく、一九五五年頃まで五人台であったものが、

一九六〇年四・五人、一九七〇年には三・八人、二〇〇五年には二・五二人と移行している。脱産業化の時代を迎え、家族内でも個人化が進み、家族は「個人にとって一つのライフスタイルへと変化し、意識的な選択に関わる事柄になった」(八)のであり、その中で、家族の多様化が進んでいるといえる。

「おらおらでひとりいぐも」における、夫と死に別れ、子どもたちとも疎遠になり、「孤食」をする桃子さんは、「超高齢社会」の家族の多様化・個人化を反映した人物だということが出来るだろう。

三、「おらおらでひとりいぐも」の周辺情報

作者の若竹千佐子は、一九五四年、岩手県遠野市生まれ。遠野で育ち、子どもの頃から小説家を志望した。岩手大学教育学部卒業後、岩手県内の中学校の臨時採用教員として働きながら教員採用試験を受ける。しかし合格せず、夫と出会い、結婚する。三〇歳で上京し、埼玉県南浦和で学習塾に就職した。息子と娘の二児に恵まれ、都心近郊の住宅地で子育てをした。その間も小説の元となるメモを書き続けており、本人の記載によれば、河合隼雄、上野千鶴子、斎藤美奈子の本を愛読したとされる。

また石牟礼道子、深沢七郎、町田康の作品については方言の効果に惹かれたとされる。二〇〇九年夫が五七歳の時脳梗塞で死去。息子から小説講座を勧められ、通いはじめ、創作をおこなった。二〇一七年、第五十四回文藝賞を受賞しデビュー。二〇一八年一月、「おらおらでひとりいぐも」で第一五八回芥川賞を受賞した(九)。

文藝賞の選評では、町田康は個人の自由や自立の反対側にある「重くて辛いものも含めた両方を受け取って、人生を肯定的にとらえるまでにいったのが見事」(一〇)と評価する。

芥川賞選評であるが、小川洋子は、「卓越した語りの文体は、自由気ままを装いながら、実に用心深く論理的に組み立てられている」(一一)として方言を交えた文体を評価する。宮本輝は、「たぶんさほど多くはないであろう未来への向日性に富んでいる」(一二)としてその七四歳の内面の「深さ」を評価する。奥泉光は登場人物桃子さんの思考が中核をなす小説であり、「「思弁」をもって小説を構成して強度を保つのは一般に難しい」としたうえで「見事に達成されている」(一三)として思考ドラマとして成功していることを指摘する。川上弘美は「真面目さを感じました」として「普遍的な真面目さとは違う真面目さが必要なんですたぶん、と答えたく

思います」(一四)と述べている。宮本の「向日性」、川上の「真面目さ」に関しては「老い」と「個」の在り方に関する考察において述べたい。

四、「おらおらでひとりいぐも」の「老い」と「個」

「おらおらでひとりいぐも」の「老い」と「個」の問題に関して、前述した「超高齢社会」における「家族」の多様化を基盤としながら桃子さんを中心に考察を進める。

「おらおらでひとりいぐも」の舞台は現代日本、三月から次の年の三月までの約一年である。主人公の桃子さんは一九六四年東京オリンピックの頃に故郷から家出しており、地元の八角山に自らを重ねる。両親に決められた婚姻の拒否し郊外の新興住宅地に子供二人(兄妹)の核家族であった。

回想においては、一九七五年、子どもを二人抱えて頑張っていた「いわば桃子さん宴のときである」(二八頁)とある。桃子さんは満二四歳で故郷を離れ、現在七四歳である。夫の周造が死んだのは一五年前(桃子さん五九歳の時)である。桃子さんの三一年の結婚生活は、東京オリンピックの時期に夢中で働いて周造と出会うところ

から始まり・郊外の新興住宅地・戸建て・核家族と高度経済成長期以降の核家族の象徴のように描かれている。高度経済成長時代の核家族のその後を描く点にこの作品の位置づけを行うことが出来るだろう。前述したように、「超高齢社会」において、二〇一五年では二割を超える女性高齢者の単身世帯があり、桃子さんもそこに当てはまる。

結婚からの時間の流れに関しては、桃子さんの思考にもしばしば登場しており、また様々なもので比喩されている。例えばフラミンゴのカレンダーを見て「この絵を初めて見たとき、自分はどのへんだろうと桃子さんは思った。桃色の煙にしか見えないあたり、まだ先頭の羽音に気付いていなくて、のんびり水草をついついている。そこに自分はいいるのだろう」(二九頁)とある。ここには、育児に精いっぱい、まだ老後や旅立ちを考えてすらない桃子さんの若き時代がフラミンゴによって回想されている。

「おらおらでひとりいぐも」は作品中に回想を交えることで桃子さんの経験した時間を重層的に表すだけでなく、自らが一生のうちのどこに在るかを感じ取る語り手によって、個人の辿った時間である「ライフコース」(一五)が明確に刻まれている作品だといえよう。

小川洋子は本作品の語り手の「論理性」「用心深さ」について評において触れている。時間の流れがレトリックを用いて明確に刻まれる点に、この作品の一つの特徴があるといえよう。

では、七四歳の桃子さんは、自らの重ねた時間、特に「老い」をどのように語るのだろうか。

桃子さんは、手の皮を引っ張った際痛くないと言った祖母のように老いた手が自分にも来たことを実感し「こんな日が来るとは思わなかった」（五頁）と現状を語る。

この作品では、常にジャズの音がBGMのように流れているのであるが、桃子さんはジャズを聴いて「自然に手が動き、足が床を踏み鳴らし、腰をくねらせ、気が付けば狂ったように体を動かしていた」「真新しい仏壇の前で、真っ裸で踊っていた日を桃子さんは忘れていない」（九頁）とある。ジャズが夫の死後の桃子さんを救済する訳である。ただしこれは桃子さん五九歳の時点であり、今は老いて踊ること自体が無理であることを読み取ることが出来る。この語りからも時間の流れが明確に刻まれていること、「老い」を客観的に重なっていく「層」として語ろうとする語り手の方法を読み解くことが出来るだろう。

本作品では、主婦の暮らしに関して「長年の主婦とい

う暮らし」（一一頁）としそれが多様で細切れであることを指摘する。そして自らの中の細切れな柔毛突起のような心内の思考を束ねる存在として桃子さんが描かれ、ここには柔毛突起という比喩を使いながら自らの人生を多様な側面から客観的にとらえる姿勢を読むことが出来る。

老いについてだが、「生ぎでぐのはほんと悲しいけどなんだと。それまでのおらは努力すれば何とかなる、道は開けると思ってた」「人もねずみもゴキブリも大差がね」（二一―二三頁）という会話が展開される。

このような生に対する諦念は、作品における「老い」の思考の軸であり、作者若竹千佐子が愛読したとする深沢七郎の作品とも重なるだろう（一六）。

また、生に対する諦めともいえる回想は、桃子さんが自らの祖母を回想する際によくみられる。「ばっちゃん、おらはここにいるよ。おめはんの孫はここでこうして暮れ方の空を眺めているよ。こういうふうになっちゃった。これでいいのすか」（三一頁）「ばっちゃんあの頃のように言う。うんと良くもねが、さりとてうんと悪くもね、それなりだぁ」（二三頁）という回想からは、祖母の様子と自分の状況を重ねていることが分かる。

作品中にて引喻される小林旭「さすらい」もまた、

「夜がまた来る、思い出つれて」「この歌詞をおらほど深く理解している人間が他にいるだろうか」(二四頁)とあり、この歌詞の先には「どうせ死ぬまでひとりひとりぼっちさ」とあることから人間の「孤独」と諦念を表明するために、引喩がなされていると言えよう。

「古い」に関しては、諦念と「孤独」に満ちている。ただし、この作品の特徴は「層」として「ライフコース」をとらえることで、そこに学びを見つけ出す点である。

あの頃の桃子さんは自分の老いを想像したことがあっただろうか。ましてや、独り老いるなどということを一度たりとも考えたことがあっただろうか(三〇頁)

若さというのは今思えばほんとうに無知と同義だった。何もかも自分で経験して初めて分かることだった。ならば、老いることは経験することと同義だろうか、分かることと同義だろうか。老いは失うこと、寂しさに耐えること、そう思っていた桃子さんに幾ばくかの希望を与える。楽しいでねが。なんぼになっても分がるのは楽しい。内側からのひそやかな声がある。その声にかぶさって、

んでもその先に何があんだべ。おらはこれが何分がろうとするのだべ、何が分がったらこごから逃してもらえるのだべ。正直に言えば、ときどき生きあぐねるよ(三〇～三一頁)

このように、桃子さんは、「層」としての自らの「古い」を多様な時間から語り、孤独と同時に分かる・学び続けることの楽しさに至るのである。

桃子さんが経済的に困窮している様子はない。経済的な問題ではなく、「孤独」と諦念という課題と向き合い、また、高齢単身世帯という「超高齢社会」の一つの典型の中にいる桃子さんにとって、学びが「個」の救いとなる可能性が示唆されている。選評でも触れられていた「向日性」「真面目さ」は、この学びの姿勢に起因するものだと考えられる。

五、方言と語りの位相

「おらおらでひとりいぐも」の選考評において高く評価されている方言の使用について考察する。

引喩がなされている宮沢賢治の作品でも共通語と岩手の方言が意図的に使用されていた。

では「おらおらでひとりいぐも」では、どのような表現となっているだろうか。

「おらおらでひとりいぐも」では一人称「おら」と三人称の「桃子さん」という語り手が交互に、時に入り混じりながら登場する。自分のなかに東北弁で話す自分がいる「おらの心の内側で誰かがおらに話しかけてくる。東北弁で。それも一人や二人ではね、大勢の人がいる。おらの思考は、今やその大勢の人がたの会話で成り立っている」(二三頁)とされており、それは次のような形である。

そもそもおらにとって東北弁とは何なんだべ、と別の誰かが問う。そこにしずしずと言ってみれば人品穏やかな老婦人のごとき柔毛突起現れ、さも教え諭すという口ぶりで、東北弁とは、といったん口ごもりそれから案外すらすらと、東北弁とは最古層のおらそのものである。もしくは最古層のおらを汲み上げるストローのごときものである、と言う(二五頁)

この様に桃子さんの心の中に方言を話す複数の声が存在し、思考を複雑化して語るのがこの作品の特徴である。

宮沢賢治の「永訣の朝」や「小岩井農場」では詩人の方言の使用に関する取捨選択が明確に行われている。例えば「永訣の朝」では妹トシの言葉に方言が使用され、その他は共通語であることや、「小岩井農場」では農夫との会話においてのみ方言が使用され、それ以外は共通語である、というように場や相手によって共通語と方言が使い分けられる。これに対して、「おらおらでひとりいぐも」では方言が、共通語の語り手に乗っ取ってしまうような、対等で、時に優勢になる表現方法として使用されていることが分かる。

この方言に関しては、「東北弁とは最古層のおらそのものである」(二五頁)とされ、「原初の風景」(二六頁)として語られている。また、「主語は述語を規定するのでがす。主語を選べばその層の述語なり、思いなりが立ち現れるのす」(一六―一七頁)という方言の使用からは、「おら」と「桃子さん」による個人の中の多様な人格が方言の使用で技巧的に表現されていることを示している。

ただし、方言が常に使用されているわけではない。「東北弁は単に郷愁にすぎねでば(中略)しかしすぐにそんな単純なもんだべか、おらと東北弁は尋常一様の間柄でねえと反論も生まれ、一同来しか方に思いを巡らす」

(一七頁)とあるように東北弁の使用が桃子さんの内部の多様な人格により内省もされている点もある。ここでの方言は場や役割に縛られない奔放さを持つのである。

この対等であり、同時に「古層」でもある方言の使用が「おらおらでひとりいぐも」の語りの特徴と言えよう。

「おらおらでひとりいぐも」は個のそれぞれの時間と出来事を明確にし「層」として捉えることで「老い」を「個」のライフコースとして示す作品だといえよう。

さらに共通語と方言のせめぎあいも多様な人格を描き出す効果を持つといえるだろう。

六、宮沢賢治作品の再創造としての「おらおらでひとりいぐも」

タイトルとなっている「おらおらでひとりいぐも」と「永訣の朝」の「[O] ra Orade Shitori egumo」との相違点、そこから「おらおらでひとりいぐも」の特徴を考察する。

詩集『春と修羅』に収録された「永訣の朝」には「一九二二、一一、二七」の日付がある。この日付は、トシが亡くなった日付であるが、作品自体は後に作られたと考察される。あくまでこの日付は詩が産まれる出来事

があった日と言えるだろう。

では少し長くなるが宮沢賢治「永訣の朝」をあげよう。

けふのうちに

とほくへいつてしまふたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

(あめゆじゅとてちてけんじや)

うすあかくいつさう陰惨な雲から

みぞれはびちよびちよふつてくる

(あめゆじゅとてちてけんじや)

青い「蓴」菜のもやうのついた

これらふたつのかけた陶碗に

おまへがたべるあめゆきをとらうとして

わたくしはまがつたてつぼうだまのやうに

このくらいみぞれのなかに飛びだした

(あめゆじゅとてちてけんじや)

蒼鉛いろの暗い雲から

みぞれはびちよびちよ沈んでくる

ああとし子

死ぬといふいまごろになつて

わたくしをいつしやうあかるくするために

こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ

ありがたうわたくしのけなげないもうとよ
わたくしもまつすぐにすすんでいくから

(あめゆじゆとてちてけんじや)

はげしいはげしい熱やあえぎのあひだから
おまへはわたくしにたのんだのだ

銀河や太陽、気圏などとよばれたせかいの
それからおちた雪のさいごのひとわんを……

…ふたきれのみかげせきざいに

みぞれはさびしくたまつてゐる

わたくしはそのうへにあぶなくたち

雪と水とのまつしろな二相系をたち

すきとほるつめたい雫にみちた

このつややかな松のえだから

わたくしのやさしいもうとの

さいごのたべものをもらつていかう

わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ

みなれたちやわんのこの藍のもやうにも

もうけふおまへはわかれてしまふ

(O) ra Orade Shitori egumo)

ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ

あああのとざされた病室の

くらいびやうぶやかやのなかに

やさしくあをじろく燃えてゐる

わたくしのけなげないもうとよ

この雪はどこをえらばうにも

あんまりどこもまつしろなのだ

あんなおそろしいみだれたそれから

このうつくしい雪がきたのだ

(うまれでくるたて

こんどはこたにわりやのごとばかりで

くるしまなあよにうまれでくる)

おまへがたべるこのふたわんのゆきに

わたくしはいまころからいのる

どうかこれが天上のアイスクリームになつて

おまへとみんなとに聖い資糧をもたらずやうに

わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ(二七)

「永訣の朝」は共通語で書かれる詩の中で○で表現
される行に方言が使用されている。特に「(O) ra Ora
de Shitori egumo)」という死にゆく妹トシの発言とも
詩人の心内表現とも考えられる方言を元としたローマ字
表現があり、『春と修羅』の注には「あたしはあたしで
ひとりいきます」(一八)とある。

この表現に関して小沢俊郎は次のように述べる。

かなは、漢字よりは意味性が弱いにしても、直接に語を構成してゆく単位文字だけでも、ローマ字はさらに意味から遠い、音だけを感じさせる文字である。

Ora Orade Shitori egumo は、そのことばが賢治の耳に音としてだけ響いたことを示しているのであろう。知らない外国語を聞いた折のように、その音声の意味を持たないものごとく聞えた。ということは、それほど、聞き手賢治の気持ちにとって異質のものだった、ということになる（一九）

小沢の異質の言葉という点には同意できる。妹の言葉は、人間は孤独に死んで現世から離れなければならないという強い決意と「あなた」もそうであるという強いメッセージがある。

また、次のように宗教的な読み方もある。

第二主題のローマ字による文節書きは、激しい熱にうなされながら口にしたとし子の途切れ途切れの言葉が、法華経の一乗真実及び利他真実の教えを信じ

て旅立とうとするけなげな決意として、「わたくし」の胸郭を揺るように響いていくさまを表している（二一〇）

「（一〇）ra Orade Shitori egumo）」を両論は妹が発した言葉として読んでいる。ここでは妹が「わたくし」に発した言葉という両論に基本的には同意する。ただしこのローマ字表現が詩人の内心の言葉である可能性もあり、実際には聞こえたのかどうかは不明ではある点も考慮すべきである。

妹が発した言葉との前提で読むならば、このローマ字は妹の決別、そして兄への計らいと理解することが出来る。この言葉は他者があって初めて成り立つ言葉であり、あなたも一人で生きなさいという厳しい言葉でもある。

ローマ字表記は「わたくしもまつすぐにすすんでいくから」という詩の一節とも呼応しているといえる。この点で、「わたくし」の「まつすぐにすすんでいく」という悲壮な決意とも呼応しているのである。

では「おらおらでひとりいぐも」ではローマ字から平仮名となり、桃子さんによって発せられる「おらおらでひとりいぐも」という一節はどのように使用されているのだろうか。

夫の周造が死んで、周造が行ったはずの目に見えない世界があつてほしいという切実な願いは桃子さんの思考を変える。周造の声や様々な声が聴こえて桃子さんの孤独を支えるようになっていく。

桃子さんは「もう今までの自分では信用できない。おらの思つても見ながつた世界がある。そこさ、行つてみて。おら、いぐも。おらおらで、ひとりいぐも」(一一五頁)と宣言し、「この世の流儀はおらがつぐる」(一一六頁)と世間の常識を超える。

ひとりで孤独のなかで生きるというのは「永訣の朝」の妹が詩人に発したローマ字表記のメッセージと同じであり、強く厳しい選択である。この点で「おらおらでひとりいぐも」は「永訣の朝」の妹のメッセージを、孤独に生きることを選択した語り手である桃子さん自身に映しているといえよう。ただし桃子さんは、それを「永訣の朝」にあるような宗教性や決別ではなく、多様な人格による言葉のせめぎあいと、自らの時間的な「層」によつて、日常の中で周造のいる世界へ行こうとする点で、この言葉は異質のローマ字表記ではなく日常に使用される平仮名であるべきであり、本作品の「永訣の朝」からの再創造の特徴があるだろう。

妹トシの言葉は詩人にとって異質な言葉であり、同時

に「おら」はあちらの世界に一人で行くので、あなたも一人で生きなさいという厳しさのある言葉であつた。

若竹千佐子「おらおらでひとりいぐも」では、「永訣の朝」の妹のローマ字表記を使用しつつ平仮名に変換し、聖性や宗教性ではなく、あくまで時間的な「層」と人格の多様化によつて「個」の内面を観察し、絶対的な基準の無い日常を学ぶことで主体的に生き抜く方法として「おらおらでひとりいぐも」が使用されているのである。

同時に桃子さんの夫である周造についての再創造は典拠を日常に落とし込む役割を持っている。

周造は宮沢賢治の「虔十公園林」に登場する虔十に喩えられる人物であつた。

「おらおらでひとりいぐも」において、周造は、「目をみはるような美しい男」(七八頁)とされており、出会ひのシーンでは「まさか、でも虔十だ。あの寶石のような物語の主人公が目の前にいる」(八〇頁)とされる。その後「雨の中の青い藪を見てはよくこんで目をパチパチさせ／青ぞらをどこまでも翔て行く鷹を見つけてはねあがつて手をたたいてみんなに知らせました」(八〇頁)という「虔十公園林」本文が引用されている。

ただし、引喩されている「虔十公園林」ではそのあと、「けれどもあんまり子供らが虔十をばかにして笑ふもの

ですから虔十はだんだん笑はないふりをするやうになりました」(一一) となり、虔十が周囲の人からは距離のある人物として造形されている。虔十は、杉の苗を七〇〇本購入してほしいと両親に頼み、望みを果たすものの、若くしてチフスで死んでしまう。

一方、桃子さんと同郷の周造は明るく人望のある人物であり、「周造の為に生きる、が目的化した」(八三頁)とあり、「虔十公園林」の虔十に比べて、周造は、周囲との違和のない人物だということが出来る。周造には父に認められたいという想いがあり、それが彼を苦しめていたことも描かれる。また木版画に喜びを見い出す多面的な人物でもある。ここでもまた、虔十のように周囲から距離があり、後に子どもたちに親しまれるスギ林を残す「聖性」を持った人物に比して、悩みも明確にし現実的な人物を造形しているといえよう。

七、「超高齢社会」における「個」——「家族」から離れて

夫と死別し、息子・娘の直美が離れていって、孤独になった桃子さんは、多様な「個」について考え始める。本作品における「老い」と「個」に関する思考はどのよ

うな特徴があるのか考察する。

かつての親は末っ子が成人するころには亡くなってしまった(中略)今の親は自分の老いどころか子の老いまで見届ける。そんなに長いんだったら、いつまでも親だの子だのにこだわらない。ある一時期を共に過ごして、やがて右と左に分かれていく。それでもいいんだと思う。

それでもちゃんと覚えているのだ、大事だということ(五二頁)

ここには、前述したライフスタイルの一つとして、選択される家族像が明確に描かれている。

夫周造との関係はどうだろうか。周造の死に関しては「恐れていだ最悪のことが起こってしまったあのどぎよ」(二三頁)とあり周造の死は桃子さんにとって大きな衝撃を与えていることが分かる。ただし、「おらおらでひとりいぐも」においては、周造への「愛」に関しても「学び」への転換がなされる。

「でいじなのは愛よりも自由だ、自立だ。いいかげん愛にひざまずくのは止めねばわがね」(九三頁)とあり、ここからは、周造の死後、桃子さんの中で、近代家族を

支えたロマンティッククラブ・イデオロギー、「一生に一度の恋に落ちた男女が結婚し、子どもを生み育て添い遂げる」(二二) から離れつつあることが分かる。また人の未来を考えた桃子さんは「子供はどやって育てていくのだが。／結婚という形態はもう無くなっているのかもしれないね。／人は独り生きていくのが基本なのだと思う。そこに緩く繋がる人間関係があればいい」(九八頁)として「家庭を親密な、このうえなく大切なものとする」(二三) 家庭イデオロギーという近代家族を支えた柱から離れていく姿勢を見ることが出来るだろう。

桃子さんは、自らを時間の「層」の中に置き、方言を交えて多様な人格と対話することで「孤独」ではあるが「老い」は学びであり、年を取ることは成熟であり、「孤独」であり、であるがゆえに主体的な「個」を発見する。この桃子さんの発見は、「超高齢社会」における「老い」と「個」における学び続ける生の在り方を示すだろう。ただし、桃子さんは、ロマンチッククラブ・イデオロギーや家庭イデオロギーから切れるのではなく「遠ざかる」という点が興味深い。

それを象徴するのは物語の終結部において、桃子さんを三月三日に孫が訪ねてくるシーンである。この孫は、四月から三年生で一人、桃子さんを訪ねてきた。この孫

から、疎遠になっている自らの娘も「コーفنすると東北弁になる」(一六三頁) が伝えられる。最後は孫があげた窓から「春の匂い」(一六四頁) がして締めくくられる。この孫は、家族が疎遠になりながらもどこかで繋がっていることを示しているだろう。孫は少ないながらも桃子さんの方言を解し、娘も興奮すると方言を話す。この点で非常に緩いつながりが確認されて、この作品は終わるのである。

桃子さんの立場はロマンチッククラブ・イデオロギー、家庭イデオロギーから離れつつも周造との関係やその過去、子ども孫との関りを「層」として相対的に保持し、観察する。時間の流れの中で自らを「層」として冷徹に観察する視座が本作品の「老い」の特徴である。

八、おわりに

桃子さんは「老い」は学びであり、成熟であり、孤独ではあるが自由との認識に到達する。自由で孤独で学び続けるという、「超高齢社会」におけるマイナスのみではない「老い」の提示である。桃子さんは経済的な保証がある上で、ロマンチッククラブ・イデオロギーや家庭イデオロギーから「遠ざかる」。ただし「個」を孤独から

救う機能を果たした両イデオロギーが揺らぐ中で、離れつつも一方でそれへの愛情や愛情ゆえの拘束を「層」として観察することで、自らの位置を学び、日常の「孤独」と諦念を乗り越えるという、「層」として自分と社会の繋がりを見つめるという現代の生き抜き方の提示がなされていた。

また、宮沢賢治作品の再創造として考えたとき、宮沢賢治の作品にしばし描かれる仏教的な時間や地質学に由来する「層」に接近し、「層」の中で自らを捉える試みは同じであっても、聖性や宗教性を頼るのではなく、学びと多様な人格のせめぎあいによって現実的な自らの「層」を見つめ現実社会で生きていくという再創造が行われていることが分かった。

注

- 一 内閣府『令和元年版高齢社会白書』全体版 (PDF) 二〇四頁 <https://www8.cao.go.jp/koure/whitepaper/w-2019/zenbun/01pdf/index.html> 二〇二二年一月三〇日閲覧 なお、高齢化の定義に関しては定義揺れのあることが報告されている。杉原直樹・高江洲義矩「高齢化社会をめぐる用語の意味するもの」(『老年歯科医学』第一五巻第一号、日本老年

歯科医学会、二〇〇〇年七月、一〇～一三頁)

- 二 『令和元年版 少子化社会対策白書』全体版四〇五頁 <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2019/01pdf/tonpen/pdf/sl-2.pdf> 二〇二二年一月三〇日閲覧
- 三 国立社会保障・人口問題研究所『日本の世帯数の将来推計—二〇一五(平成二七年)～二〇四〇(平成五二年)—(二〇一八(平成三〇)年推計)』国立社会保障・人口問題研究所、二〇一八年二月、一五頁
- 四 鍾水浩編『共食と文化のコミュニティ論』晃洋書房、二〇二〇年四月、一一四頁
- 五 目黒依子『個人化する家族』勁草書房、一九八七年五月、iv～v頁直前二つの引用も。
- 六 注四同書、一一一～一二頁
- 七 注四同書、一二頁
- 八 今村仁司他編『岩波 社会思想事典』岩波書店、二〇〇八年三月、二九頁
- 九 若竹千佐子「今年、初孫が産まれるんですよ」(『文藝春秋』第九六巻第三号、文藝春秋社、二〇一八年三月、三三八～三四三頁参照)
- 一〇 『文藝』河出書房新社、二〇一七年十一月、七五頁
- 一一 『文藝春秋』第九六巻第三号、文藝春秋社、

二〇一八年三月、三三二頁

一二 注一同誌、三二五頁

一三 注一同誌、三二七頁

一四 注一同誌、三三一頁

一五 小笠原祐子「ライフコースの社会学再考—ライフ

サイクル視点再導入の検討」日本大学経済学部編

『研究紀要』、七五、日本大学経済学部、二〇一四年

一月参照

一六 深沢七郎著・新海均『生まれることは屁と同じ

…深沢七郎対談集』河出書房新社、二〇一二年一

月 そのほか「栖山節考」のおりんととの相違点・

「人間滅亡の人生案内」における「地球上には個人

だけがあるのです（中略）家だ、妻子などというも

のから離れていい筈です」（『深沢七郎集』第九卷、

筑摩書房、一九九七年一〇月、三六一―三六二頁）

等の思考との関連については別稿にて考察する。

一七 宮沢賢治『新校本宮澤賢治全集』第二卷、筑摩書

房、本文篇、一九九五年七月、一三八頁

一八 注一七同書、一四五頁

一九 『小沢俊郎宮沢賢治論集2 口語詩研究』有精堂、

一九八七年四月、一五頁

二〇 吉良幸生「『永訣の朝』の位相—宮沢賢治の挽歌

をどう読むか—」『あいち国文』第九号、二〇一五
年九月、二八頁

二一 宮沢賢治『新校本宮澤賢治全集』第一〇卷、本文

編、筑摩書房、一九九五年九月、一〇三頁

二二 千田有紀『日本型近代家族 どこから来てどこへ

行くのか』勁草書房、二〇一一年三月、一六頁 な

お本作とロマンティックラブ・イデオロギーとの関

わりについては対幻想の解体という視点で言及され

ている。野坂幸弘「若竹千佐子『おらおらでひとり

いぐも』の愉しみ」（『賢治学+』第一集、岩手大学

人文社会科学部宮沢賢治いわて学センター、二〇二

一年六月、一五一頁

二三 注二三同書、一七頁

本論文は、二〇二〇年八月二一日Noonにて行われた
日中シンポジウム（代表 王书玮・北京科学技术大学
登壇 中村三春・大國眞希・大島丈志）「平成文学と高
齢化社会」の成果の一部である。当日ご意見をくださっ
た方々に感謝する。

（本学教授）